



字章



高志保

プロフィール

高志保(通称タカシッブ)は村内における古い集落の一つであり、『琉球国高究帳』(一六四〇年代)に「たか志ふ村」と確認できます。また、海岸に位置する七、八世紀頃の遺跡である連道原貝塚からは唐(現在の中国)の貨幣である「開元通宝」が出土しています。

戦前はサトウキビ栽培を中心とした農村であったが、沖繩戦を境にその様相は一変しました。戦後、村内全域が米軍に占領されるなかで、いち早く先遣隊を結成し最初に帰村が許可されました。そして高志保以北の村民はこの地に帰村しました。そのため人口が一挙に集中し、市街地が形成されました。集落中央を貫いて米軍による軍道(現在の県道六号線)が敷設され、その道路沿いに商店街や銀行、農協等が立地し、読谷村の中心的な通りとなりました。

西側の農地及び海岸は長く軍用地(ボーローポイント飛行場)として接収されましたが、一九七四年(昭和四九)に返還され、土地改良事業により農地基盤が整備されました。また海岸線ではリゾート開発がすすめられ、地域密着型の観光地づくりが展開されています。



民俗芸能「馬舞」



高志保大通りエイサー天国



がじまる会



高志保の文化

高志保に伝わる民俗芸能「馬舞」は現在まで約四〇〇年間脈々と継承されており、地域内、村内に限らず、県外、国外、多くの機会、場所で演舞されています。また読谷村を代表する伝統工芸「読谷山花織」復興の地(「人間国宝」與那嶺貞出身地)、読谷村における地酒泡盛の発祥地としても知られています。



都屋



字章

プロフィール

都屋は読谷村唯一の漁港で一九四六年に字座喜味から独立した新しい集落です。現在の居住地は、戦後、元の集落地区を区画区分し整備したものです。復帰後、近代漁業をめざし漁港及び製氷冷凍施設、事務所及び集会施設等が整備されました。

本村漁業も地域社会の変化にともない大きく変わりつつあります。定置網や蓄養、養殖漁業の振興などに加えて遊漁、ダイビングなどの海洋レクリエーション事業に取り組んでいます。こうした現代的な事業展開と漁港や海に面するという生活環境を活かし、住環境の整備、率先した汚水対策を通して海域の保護を進めなくてはなりません。

また波平陸軍補助施設跡地には都屋の里、救護園、診療所、生き生き健康センター等が集約的に整備され、保健・医療・福祉の拠点地区となつていきます。



ゆいまーる共生事業



敬老会

都屋は漁村ですが、今日では漁家以外の人々も多く、多様な人々が参加する地域として賑わっています。



おさかなフェスタ



都屋漁港